幼年教育研究年報，第26巻
The Annual Research on Early Childhood, 2004, **26**,

研究論文

幼児の対人葛藤が遊びに与える影響

中川美和[1]・山崎晃[2]

The influences of interpersonal conflicts on plays of preschoolers

Miwa Nakagawa[1] and Akira Yamazaki[2]

The purpose of this study was to identify whether preschoolers' plays were different between pre- and post-conflict, and whether it was different depending on the age. Four-year-old children and 6-year-old children were observed in free play situations. It was found that 4-year-old children experienced the interpersonal conflicts in situations apart from plays, and 6-year-old children experienced them in play situations, although total frequencies of occurrence in interpersonal conflicts weren't different. Additionally, parties concerned who were engaged in cooperative play before an interpersonal conflict shared play after that, in term of 4-year-old. On the contrary, with regard to 6-year-old children, parties concerned who were engaged in cooperative play before an interpersonal conflict didn't always share plays, engaged in parallel plays, or stopped playing together after that. Results indicated that situations where interpersonal conflicts occurred were different depending on age, and that interpersonal conflicts influenced on 6-year-old children's plays.

Key Words: interpersonal conflicts, play, preschoolers

問題と目的

幼児の社会性の発達において，対人葛藤は非常に大きな役割を担う(Shantz, 1987)。対人葛藤を解決するための方略を模索する中で，幼児はどのような方略が他児に受け入れられ許容を導くかを認識するようになる。対人葛藤場面で用いられる問題解決方略には年齢による違いが見られる。例えば，年少児の多くは対人葛藤に直面した際，自己主張的な方略を用いる（山本，1994）。状況情報から他者の感情を正確に推論することができるのは年中児以上であり（笹屋，1997），年少児は自分の行動が他者に不快感を与えたとしてもそれに気づかない。このような年少児における他者感情推論能力の低さが，彼らの自己主張的方略につながると考えられる。自己主張的な方略は，対人葛藤の解決に結びつきにくいだけでなく当事者間の関係をさらに悪化させることが予測されることから，対人葛藤解決や葛藤終結後の人間関係にネガティブな影響を与える方略であるといえる。年長児になると，幼児は謝罪や弁明などの協調的方略を用いるようになる。謝罪は円滑な対人葛藤終結を導くだけでなく(Gonzales, Pederson, Manning, & Wetter, 1990)，被害者から許容を得る効果があり(e.g., Darby & Schlenker, 1982; Darby & Schlenker, 1989)，また「違反を犯した加害者は被害者に謝罪しなければならず，謝罪を受けた被害者は加害者を許さなければならない」という謝罪－許容スクリプト(Darby & Schlenker, 1989)が幼児期において既に確立されている。このことから，加害者の謝罪は対人葛藤を円滑に終結させるだけでなく，対人葛藤終結後の当事者間の人間関係を良好なものにするといえる(Couch, Jones, & Moore, 1999)。このように，対人葛藤場面で幼児が用いる問題解決方略は年齢によって異なり，またそれにともなって，対人葛藤終結後の当事者間の関係にも変化が見られるようになる。

対人葛藤の生起頻度は対人葛藤当事者の人間関係によって異なる。例えば，Hinde, Titmus, Easton, & Tamplin(1985)によると，幼児は親しい他者に対して脅しや攻撃，拒絶，反抗などの敵対行動を頻繁に示す。このことは，親しくない他者よりも親しい他者との間で，幼児は対人葛藤を生起させやすいことを

[1] 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期
[2] 広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設

示唆している。しかしながら一方で，友だち関係にある他者との対人葛藤は，そうでない他者との対人葛藤に比べると少なく，幼児は友だち関係にある他者との対人葛藤をより避ける傾向にあるという研究報告もなされている(Hartup, Laursen, Stewart, & Eastenson, 1988)。対人葛藤当事者間の人間関係と対人葛藤の生起についてこのような研究間の相違が見られる理由の１つに，これらの研究では対人葛藤が生起する状況が考慮されていないことが挙げられる。すなわち，対人葛藤が遊びや相互作用の中で生じたものか否かを考慮していないことが，このような研究間における見解の相違を生み出したと考えられる。遊びは友だち関係にある親しい他者と展開されることが多く(Baudonniere, 1987)，遊びの中で幼児は自己の欲求や要求を多く表出する。したがって遊び以外の場面に比べて遊び場面では，幼児が互いの主張をぶつけ合う機会が多く，対人葛藤の生起頻度は高くなると思われる。他方，特に年長児において，遊び以外の場面で幼児が文脈に関係なく，友だち関係にある幼児を攻撃し対人葛藤を生起させるとは考えにくく，遊び状況以外での対人葛藤の生起頻度は低いであろうことが予測される。すなわち，従来の研究における友だち間で見られる対人葛藤の生起についての見解の相違は，対人葛藤状況が考慮されていないことに一因があり，対人葛藤が遊びの中で生起したかを確認することによって，幼児が友だち関係にある他者との間で生起させる対人葛藤についてより明確な情報を得ることができると考えられる。

対人葛藤が遊び場面の中で生じた場合，その遊びは対人葛藤によって大きな影響を受ける。Hartup & Laursen(1991), Hartup et al. (1988)は，友だち関係にある２者間で対人葛藤が生じるとき，対人葛藤終結後，当事者は互いに距離を置くことなく近くで相互作用を行うと報告している。しかしながら，友人関係にある幼児は対人葛藤を極力回避するよう務めることを考えると(Pruitt, 1981)，対人葛藤が人間関係にネガティブな影響を与えるかについて幼児が認識している可能性が高い。そうであるならば，対人葛藤後，２者間の良好な人間関係がすぐに回復するとは考えにくく，すなわち，対人葛藤前に遊びを共有していた当事者の幼児達は，対人葛藤終結後，物理的もしくは時間的に距離を置き，並行遊びを行ったり，場合によっては遊びを中断してしまうことが予測される。

幼児の対人葛藤についての従来の研究には，問題解決方略に焦点を当てて検討したものが多く，加害者の意図性や被害者との関係性と問題解決方略との関連が明らかにされてきている (e.g., 山本, 1995)。しかしながら，解決方略の施行後，当事者の幼児の人間関係がどのようになったかについてはこれまで検討されてこなかった。方略が有効に働いたか，もしくは対人葛藤が真に解決されたかをみるためには，方略施行後の幼児の行動や人間関係にこそ焦点を当てなければならない。方略を施行後，当事者間にわだかまりや不満が残されているとき，例えその場で対人葛藤が解決されたように思われても，当事者間の人間関係はネガティブなものとなるからである。当事者の幼児にとって，対人葛藤に直面した際，その解決と同じくらいその後の人間関係は重大な関心事であるといえよう。対人葛藤前後における幼児の人間関係の変化をみるとき，遊びはその指標となる。例えば，並行遊びは他児の遊び活動への参加を認めて欲しいときにみられる遊びであることから(Bakeman & Brownlee, 1980)，対人葛藤前には遊びを共有していた当事者の幼児達が，対人葛藤後には並行遊びをしていたなら，彼らは互いに遊びを共有したくとも対人葛藤の気まずさからそうできないでいると推察される。逆に，対人葛藤前に遊びを共有していた２者が，対人葛藤後も同じように楽しく遊びを共有していたなら，彼らは対人葛藤について何のわだかまりもなく，対人葛藤前と同様の良好な人間関係を維持していると考えられる。そこで本研究では，対人葛藤によって当事者の遊びが変化するかを明らかにすることによって，対人葛藤が当事者の幼児の人間関係に与える影響を検討することにする。

本研究の目的は以下の通りである。第１に，幼児の対人葛藤を，遊び状況で生じたものとそうでないものに分け，各対人葛藤の生起頻度が年齢によって異なるかを明らかにする。第２に，遊び状況で生じた対人葛藤について，対人葛藤前と対人葛藤後では遊びに違いが見られるかを明らかにすることによって，対人葛藤が当事者の人間関係に及ぼす影響を検討する。その際，年齢による対人葛藤および対人葛藤が当事者の人間関係に及ぼす影響の違いを明確に示すために，量的な分析だけではなく，事例を用いた質的検討も行うことにする。幼児が特定の他者に親密な感情を抱き友だち関係を形成するのは３歳後半から４歳頃であり(Hartup, 1992)，また遊びはこのような友だち関係にある幼児と展開されることが多いことから(Baudonniere, 1987)，４才後半には幼児は友だち関係を形成し，遊びを展開するようになると思われる。このような特定の親しい他者との関係は加齢にともなって深まり，それにともなって相互作用の機会も増えることから，遊び状況で生じる対人葛藤は年齢が高くなるにつれて多くなることが予

測される。また，3歳後半以降，幼児が遊びを共有する他者は友だち関係にある幼児であり(Hinde et al., 1985)，彼らはこのような近しい他者との対人葛藤を回避するよう務める傾向にあることから(Pruitt, 1981)，幼児は対人葛藤が人間関係に与えるネガティブな影響を認識していることが予測される。したがって，当事者の幼児は対人葛藤前に遊びを共有していたとしても，対人葛藤後は気まずさから並行遊びを行ったり，遊びを中断することが予測される。

方法

対象児：H市内H幼稚園の4才児，6才児各20名。
手続き：自由遊び時間において，対象児一人につき15分間の観察を行った。記録にはフィールドノートを用い，対象児の遊びおよび対人葛藤について記録した。

結果

1．年齢による対人葛藤の種類の違い

幼児の対人葛藤を遊び場面で生じたものと遊び場面以外で生じたものの2つに分け，年齢によって2つの対人葛藤の生起頻度に違いが見られるかについて$\chi 2$検定した。その結果，6才児に比べて4才児の対人葛藤には遊び場面以外で生じたものが多く，一方，4才児に比べて6才児の対人葛藤には遊び場面で生じたものが多いことが分かった（$\chi^2(1) = 6.75, p < .01$）。このことから，年齢によって対人葛藤の種類には違いが見られることが示された。

2．対人葛藤前後の当事者の遊びの変化

対人葛藤が生じる前と後では当事者の遊びに違いが見られるかについて年齢別に検討した。その結果，4才児では，対人葛藤前に遊びを共有していた幼児は，対人葛藤後も遊びを共有する(100%)ことが分かった。一方，6才児になると，対人葛藤前に遊びを共有しておりかつ対人葛藤後も遊びを共有するケースは18%（2件）であり，並行遊びを経て再び遊びを共有していたケースが27%（3件）と最も多かった。また，一旦遊びを中断した後，第3者による介入を得て再び遊びを共有するケースが18%（2件）であり，遊びを完全に中断してしまうケースが18%（2件），そして遊びを共有せず並行遊びを行うケースが18%（2件）であった。このように，年齢によって，対人葛藤前後の遊びの変化には違いが見られることが示され，また，幼児の対人葛藤が当事者のその後の関係に影響を与えるのは，6才児になってからであることが示された。

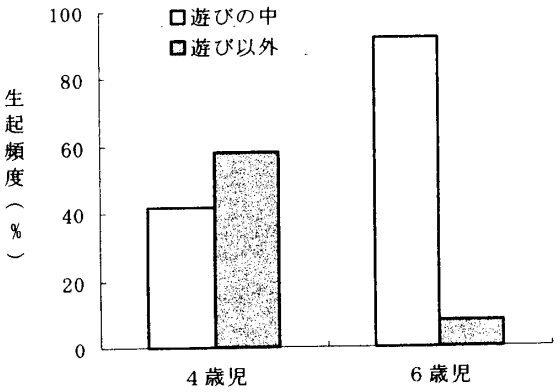

Figure 1 年齢による対人葛藤生起状況の違い

3．事例検討

＜事例1＞4才児における遊び以外の場面で生起した対人葛藤

> アキコやユキら女の子達が先生とかごめかごめをしている。先生が他児に呼ばれて遊びが一時中断した。アキコ達は円になって手を繋いだまま先生が戻ってくるのを待っている。近くでリョウタが紙の剣で他児を叩く真似などして喜んでいる。リョウタは，アキコ達がかごめかごめをしているのに気がつくと，アキコ達の近くに行き，紙の剣を片手に，アキコ達の様子をじっと見ている。リョウタはアキコの後ろに行き，
> 　リョウタ：「バーン。」
> と言って，紙の剣でアキコの頭を叩くまねをした。アキコは嫌そうな顔をして後ろを振り向き，リョウタを睨みつけた。アキコが前を向くと，リョウタは再び紙の剣を振り上げ，アキコの頭を叩こうとした。しかし，そのときかごめかごめが再開し，皆が円を描いて回り始めたため，リョウタはアキコを叩くことを諦め，剣を持った手を下ろした。

＜事例2＞6才児における遊び以外の場面で生起した対人葛藤

> テラスでトモコがキョウコを追いかけて遊んでいる。そこへリエがやって来た。リエは，
> 　リエ：「お片づけよー。」
> 言いながら，トモコの目をふざけて両手で覆っ た。リエはトモコに目隠しをしているのが誰か当てて欲しいようである。しかしト

モコはリエの手を払いのけ，後ろを振り返ると，

トモコ:「そんなことされたら嫌でしょ。」

と言った。リエはそれを聞くと，冷めた表情になり黙って部屋に戻っていった。側にいたキョウコも部屋に帰った。トモコは不満そうな顔で一人テラスに立ちつくしていた。

＜事例３＞４才児における遊び場面において生起した対人葛藤（協同遊び→対人葛藤→協同遊び）

エリコ，アキコ，ミカがままごとをしている。アキコはバギーにくまのぬいぐるみを入れ，アキコのところまでやって来た。

アキコ:「小学校の先生になる？小学校の先生になる？」

とアキコがエリコに話しかけたところ，エリコは，

エリコ:「やだ。」

と冷たく答えた。アキコはミカと一緒にバギーを押しながら，部屋の反対方向に歩いていってしまった。どうやら，エリコを除いて別の場所で二人でままごとを始めるようである。エリコは一人で，

エリコ:「おばけだぞー。」

と言って遊んでいたが，しばらくしてアキコとミカが別の場所で二人でままごとを始めていることに気がついた。エリコはロッカーから色紙を一枚とると，二人のところまへ行き，

エリコ:「エリちゃん，そこには住まないからね。」

と言った。アキコとミカは振り返ってエリコを見たが，エリコに構わずままごとを続けた。するとエリコは，

エリコ:「二人で住みな。どうせ帰ってこないんでしょ。」

と二人にきつい口調で言った。アキコは近くのテーブルから椅子を持ってきながら，

アキコ:「あっちにも（ままごと場が）あるでしょ。作ればいいじゃん，あっちにも。」

とエリコに言い返した，エリコは，

エリコ:「だっておばけがおるけん・・・・じゃ，えりちゃん一人でするからいいよ。ふん！」

と怒ったように言うと，最初にいたままごと場に戻った。しかしすぐに二人のところへやってきて，

エリコ:「仲間に入らなくてもいいからね！」

と言って泣き出してしまった。それを見たアキコ が慌ててエリコに駆け寄ると，続いてミカもままごと場から出てきた。

アキコ:「どうやって作るの？やってあげるよ。」

と，アキコはエリコが折り紙を折るのを手伝うと言ったが，ミカは黙って二人の様子をしばらく見た後ままごと場に戻ってしまった。

ミカ:「アキコちゃーん，ジュースどこ？」

とミカが呼びかけると，アキコは，

アキコ:「じゃ，ちょっと待ってて。すぐ来る。」

とエリコに言い，ミカのもとへ戻った。アキコがままごと場に戻ると，エリコも一緒にままごと場に入ってきた。それを見たアキコは，

アキコ:「恐竜だったら入ってもいい。」

とエリコに提案した。エリコは泣きやんで恐竜の名前を考え始めたがなかなか思いつかない。するとエリコは，

エリコ:「じゃあねー・・・。」

と，アキコは自分とミカを指さして，

アキコ:「トリケラとトリケラとトリケラと・・。」

と，エリコもトリケラトプスになるよう言った。エリコは，

エリコ:「やっぱり女の子だからねー（違う恐竜にしよう）。」

と言いながら，アキコとミカと３人でままごと遊びを始めた。ホールで年長児男児が基地

＜事例４＞６才児における遊び場面において生起した対人葛藤（協同遊び→対人葛藤→場の共有（並行遊び））

ごっこをしている。タクヤとヒロキが，役を巡って言い争いになった。タクヤはとても大人しい男児で，自分の要求をうまく主張することができない。それを見ていたケンゴはヒロキに向かって，

ケンゴ:「今日はタクヤくんにやらしてあげんさげんさい！だっていつもヒロくんばっかりしよんじゃから！」

と，タクヤに役を譲るようヒロキに言った。側にいたマコトも，

マコト：「そうよ！タッくんにやらせてあげんさい！」

とケンゴに加勢した。ヒロキは，顔を強張らせて二人の言うことを聞いている。基地で遊んでいたヨシオも騒ぎをききつけて近寄ってきた。ヒロキは立ち上がると，黙ってその場を去ってしまった。ケンゴは不安そうな顔でヒロキが戻ってくるのを待っている。しかし，ヒロキはなかなか戻ってこない。ケンゴはヒロキが園庭に出ていったのではないかと思い，テラスの方までヒロキを探しに行くが，ヒロキの姿は見あたらなかった。

ケンゴ：「ヒロくん，お外にもおらんかった。」

と言いながら，ケンゴはホールに戻ってきた。そこでケンゴは，ホールの隅でヒロキが女の子達とままごとをしていることに気づいた。ケンゴはヒロキに近づくと，ヒロキの手を引っ張って，基地ごっこに連れ戻そうと歩きだした。しかし，ヒロキはケンゴの手をふりほどき，何も言わず向こうに行ってしまった。 ケンゴは去っていくヒロキの後ろ姿を黙って見ていた。ケンゴはヒロキを連れ戻すことを断念したのか，シーソーで遊んでいる女の子達のところへ行き，しばらくシーソー遊びをしていた。お片づけの時間になり，お集まりのために椅子を持って皆教室に戻ってきた。ケンゴは近くにいたタクヤの腕を掴むと，

ケンゴ：「タクヤ！」

と言って，タクヤの横に自分の椅子を置いた。するとヒロキがやって来て，ケンゴとタクヤの椅子の間に強引に自分の椅子を入れ，何も言わずに座った。ケンゴもヒロキも一言も口をきかない。しかし，ケンゴは不自然にヒロキと反対の方に顔をそむけながらも，ヒロキのことが気になるのか，時折ヒロキの方を見ている。ヒロキは黙ったまま椅子に座っている。そのとき，前方からさくらがやって来て，

さくら：「サンドイッチ。（男の子と女の子が交互に座る）」

と言ったため，ヒロキは椅子を持って立ち上がり，別の場所に椅子を置いて座った。しかし，しばらくすると椅子を持って戻ってきて，黙ってケンゴの椅子の横に自分の椅子を置いた。横に並んで座っているにもかかわらず，この後二人は，お集まりが始まるまで一言も口をきかなかった。

*事例の登場人物は全て仮名である

事例１，事例２は，遊び場面以外で見られた４才児および６才児の対人葛藤である。事例からも分かるように，遊び場面以外で見られた４才児の対人葛藤は，意図的かつ悪い動機づけのもと行われる対人葛藤が多い。それに比べ，事例２に見られるように，６才児の対人葛藤は，良い動機づけのもと生じたものが多かった。このことから，遊び場面以外で生じた対人葛藤に関しては，４才児では生起頻度が高くかつ悪い動機づけのものが多い一方，６才児になると生起頻度が低くなり，また良い動機づけのものが多くなることが分かった。すなわち，遊び場面以外で生じた対人葛藤は，加齢にともなって量的および質的に変化することが示された。

事例３，事例４は，４才児および６才児において見られた対人葛藤前後の遊びの変化を示したものである。事例３から，仲間はずれにされて遊びから除外されたにもかかわらず，年少児は対人葛藤後も遊びを共有し続けていることが分かる。一方事例４では，対人葛藤後，当事者の６才児は「口をきかず」「相互作用しない」にもかかわらず，場を共有し，顔をそむけながらも時折心配そうに相手の顔色をうかがっている。このことから，６才児になると，対人葛藤が人間関係に与えるネガティブな影響を認識し，それが遊びに反映されるようになるといえる。すなわち，対人葛藤が当事者の遊びや人間関係に影響するのは年長児になってからであることが示された。

考察

本研究の結果から，４才児と６才児による対人葛藤の生起頻度に違いは見られないものの，対人葛藤が生起する状況別に見てみたところ，４才児は遊び場面以外の状況において対人葛藤を生起させることが多く，また対人葛藤前に遊びを共有していた当事者は，対人葛藤後も遊びを共有することが分かった。一方，６才児は遊び場面において対人葛藤を生起させることが多く，対人葛藤前に遊びを共有していた当事者は，対人葛藤後も遊びを共有するとは必ずしも限らず，並行遊びを行ったり，遊びを中断することが分かった。

4才児では対人葛藤は遊び以外の場面で生起することが多い一方，6才児になると，遊びの中での対人葛藤が多くなるという結果が得られた理由として以下のことが考えられる。Parten (1932)によると，加齢にともなって幼児の遊びは変化する。つまり，2歳から5歳の間に協同遊びが増加する一方で，一人遊びは減少していく。4才児が6才児に比べて他児と遊びの中で対人葛藤を生起させることが少なかったのは，彼らの遊びに占める協同遊びの割合が小さかったことに一因があると考えられる。また，他児を友だちと認識するようになるのは3歳後半以降であり(Hartup, 1992)，加齢にともなって友だち関係は深まっていく。幼児が遊びを共有するのは見知らぬ他者よりも友だちであることが多く (Baudonniere, 1987)，友だちとの間で生じる対人葛藤の生起頻度は決して低くないことから (Hartup & Laursen, 1991; Hartup et al., 1988)，友だち関係の深まりもまた，6才児における遊びの中での対人葛藤の生起頻度を高めた一因であると考えられる。

対人葛藤前後で遊びの変化は見られるのか，またそれは年齢によって異なるかを検討したところ，4才児では，対人葛藤前に遊びを共有していた当事者は，対人葛藤後も同様に遊びを共有することが示された。その理由として，4才児が対人葛藤を人間関係にネガティブな影響を与えるものであると認識していない可能性が挙げられる。対人葛藤場面において他児の不快な感情を正確に理解することができるのは5才児になってからである（笹屋，1997）。つまり，4才児は被害者が自分のせいで不快感を抱いていることに気づかず，対人葛藤後も対人葛藤前と同じようにわだかまりなく被害者と遊びを共有することができると考えられる。また，対人葛藤経験後も彼らが遊びを共有する別の理由として，被害状況の深刻度の低さと，保育者による頻繁な介入が挙げられる。4才児の遊びはそれほど複雑なものがなく，そこで生じた対人葛藤も多くはものや役を巡る争いである。このようなシンプルかつ被害の小さな対人葛藤が4才児の間で生じた場合，その解決策はいくつかに限られており，加えてそこに保育者が介入する頻度が非常に高い。すなわち，被害状況がそれほど深刻でないことに加えて，保育者の提案する公平な解決策に従うことによって対人葛藤が解決することが多いため，被害者の幼児に不満が残されることが少ないと考えられる。そのため，彼らは被害を受けた後も，加害者の幼児と遊びを共有するのであろう。

しかしながら，6才児になると，対人葛藤前に遊びを共有していた当事者は，対人葛藤後，必ずしも遊びを共有するとは限らず，むしろ遊びを中断したり並行遊びを行うようになることが示された。このような対人葛藤後の並行遊びは，相手を許すことができないという気持ちと遊びを続けたいという気持ちの間で生じた彼らの葛藤の表れであると考えられる。加害者が謝罪を行わないとき，被害者が加害者に対して抱く怒りの感情は大きく(Ohbuchi, Kameda, & Agarie, 1989)，加害者を許し難いという気持ちから(Darby & Schlenker, 1982)加害者に対して大きな不満を抱く。また例え謝罪を行ったとしても，被害状況が大きければ加害者に対する怒りの感情はおさまらず，加害者を許すことはない(Darby &Schlenker, 1982; Darby &Schlenker, 1989)。しかしながら，友だち関係にある加害者と人間関係を維持し遊びを続行させたいという欲求も彼らの中にはあり，このようなジレンマが並行遊びに繋がった可能性が高い。対人葛藤後，6才児が並行遊びを行う別の理由は，4才児と異なり，彼らが対人葛藤を人間関係にネガティブな影響を与えるものと認識していることにあると考えられる。対人葛藤後加害者が並行遊びを行うのは，彼らが被害者から明確な許しを得ていないときが多い。このとき，彼らは被害者の怒りがおさまっておらず，遊びをこれ以上共有することが困難であることをはっきりと認識していると考えられる。しかしながら，友だち関係にある被害者と遊びを続けたという気持ちもあり，被害者の許しを得るとすぐに遊びを再開できるよう，場を共有して並行遊びを行いながら，被害者の様子をうかがっていると思われる。自分の犯した違反状況から，時間を経ても被害者の怒りがおさまりそうになく，許しを得ることができないと判断した場合，彼らは遊びを中断することを選択すると考えられる。また，加害者との人間関係維持よりも加害者に対する怒りが勝る場合もまた，遊びは中断される。このようなケースでは，被害者と加害者の関係修復が困難になることもあり，時として彼らの関係修復を援助するために保育者を初めとする第3者の介入が求められることもある。

さて，対人葛藤場面には，上述したような被害者と加害者の立場が明確である挑発場面と両者の立場が不明瞭な曖昧場面があり，幼児の対人葛藤に占める後者の割合は少なくない。対人葛藤が曖昧状況であるとき，自分が悪いと判断することは難しく，特に4才児は自己中心的なものの見方から，違反の責任を自己に帰属させにくいと考えられる。曖昧場面で生じた対人葛藤後の遊びは，挑発場面で生じたものの後に見られる遊びとは異なっているであろう。例えば，6才児では，並行遊びや遊びの中断の頻度

が高くなり，共有遊びの生起頻度が低くなることが予測される。被害者と加害者の立場が不明瞭なとき，加害者を特定することが困難であるため，当事者双方が互いに不満を抱き怒りを感じるため，遊びを継続することが困難になり並行遊びや遊びの中断が多く見られると考えられる。本研究で対象とした対人葛藤は，挑発場面についてのものであり，曖昧場面についてのものについては今後検討していく必要がある。

幼児の遊びは彼らの人間関係を知る上で重要な指標となる。本研究では，対人葛藤が幼児の遊びに影響することが示されたことから，対人葛藤によって当事者の人間関係に変化が見られることが示唆された。人間関係が深刻なほど悪化した場合，関係回復を援助する重要な役割を担うのは保育者などの第３者である。しかしながら，性急な介入が葛藤解決や良好な人間関係の回復につながるとは必ずしも言えない。例えば事例４のように，当事者の幼児が積極的に場を共有するものの，直接的な相互作用を行わないとき，それは彼らが心の内でジレンマを経験し，相互作用のきっかけを模索していることを表すかもしれない。つまり，沈黙の中で幼児は彼らなりに悩み，考え，解決策を模索しており，このような状況で保育者が安易に介入することは，彼らの考える機会を奪うことになりかねない。また，逆に事例２のように，何らわだかまりなく再び遊びを共有し始めたからといって，彼らの人間関係が真に回復したと容易に判断することは危険である。その後の遊びの展開や彼らの発言，行動内容に，彼らの人間関係が回復したかは顕著に反映されると思われる。保育者を初めとする介入者には，介入の必要性やその種類を慎重に判断することが求められる。

Hinde et al.(1985)によると，幼児は友だち関係にある他者に対してより攻撃や脅しなど，対人葛藤につながる行動を示すという。友だち関係にある他者とは多くの遊びを共有し，相互作用を行うため，対人葛藤を経験する機会も多い。幼児は対人葛藤を経験することによって社会性を身に付けていき(Shantz, 1987)，友だち関係を深めていく。つまり，対人葛藤は必ずしも当事者の幼児にネガティブな影響を与えるのではなく，友だちとの絆を強める上で非常に重要な役割を担っていると考えられる。そして，友だち対人葛藤を数多く経験していく中で，幼児は，友だちとの関係を持続させるためには，相手のことを考えて妥協することも必要であり，時には対人葛藤を回避するよう努めることも関係を持続させる一つの手段であると認識するようになる(Pruitt, 1981)。このようにして幼児は他者との親密な関係，すなわち「友情」を育んでいくのであろう。

今後の課題

本研究では，年齢によって幼児の対人葛藤の生起状況が異なること，また対人葛藤が当事者の遊びに影響することを明らかにした。しかしながら，幼児の遊びについて検討する際，他の様々な要因を考慮しなければならない。例えば，男児の遊びには支配関係が顕著に反映されることから(Thorne, 1986)，対人葛藤後，遊びを共有していたからといって，必ずしも当事者の不満が解消されているとはいえない。つまり，彼らが相手との支配関係に基づいて，遊びを共有したくないにもかかわらず共有している可能性がある。また，対人葛藤が挑発場面についてのものか曖昧場面についてのものかによっても，対人葛藤後の幼児の遊びは大きく異なってくることが予測される。これらの点については今後検討していく予定である。

引用文献

Bakeman, R., & Brownlee, J. R. 1980 The strategic use of parallel play: A sequential analysis. *Child Development*, **51**, 873-878.

Baudonniere, P. 1987 Dyadic interaction between 4-year-old children: Strangers, acquaintances, and friends: *The influence of familiarity. International Journal of Psychology*, **22**, 347-362.

Couch, L. L., Jones, W .H. and Moore, D. S. 1999 Buffering the effects of betrayal: The Role of apology, forgiveness, and commitment. In J. M, Adams., W.H,Jones. (Eds.). H*andbook of Interpersonal Commitment and Relationship Stability*(pp. 451-469) Academic/Plenum Publishers, New York.

Darby, B. W., & Schlenker, B. R. 1982 Children's reactions to apologies. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 742-753.

Darby, B. W., & Schlenker, B. R. 1989 Children's reactions to transgressions: Effects of the actor's apology, reputation and remorse. *British Journal of Social Psychology*, **28**, 353-364.

Hinde, R. A., Titmus, G., Easton, D., & Tamplin, A. 1985 Incidence of "Friendship" and behavior toward strong associates versus nonassociates in preschoolers. *Child Development*, **56**, 234-245.

Hartup, W. W. 1992 Peer relations in early and middle childhood. In V. B. V. Hasselt, & M. Hersen(Eds.),

Handbook of social development(pp. 257-281). Plenum Press, New York

Hartup, W. W. & Laursen, B. 1991 Relationships as developmental contexts. In R. Cohen & A. W. Siegel(Eds.), *Context and development*(pp. 253-279). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Hartup, W. W., Laursen, B., Stewart, M. I., & Eastenson, A. 1988 Conflicts and friendship relations of young children. *Child Development*, **59**, 1590-1600.

Gonzales, M. H., Pederson, J. H., Manning, D. J., Wetter, D. W. 1990 Pardon my gaffe: Effects of sex, status, and consequence severity on accounts. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 610-612.

Ohbuchi,K., Kameda, M., & Agarie, N. 1989. Apology as aggression Control: Its role in mediating appraisal of and response to harm. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 219-227.

Parten, M. B. 1932 Social participation among preschool children. *Journal of Abnormal and social Psychology*, **27**, 243-269.

Pruitt, D. G. 1981 Negotiation behavior. Academic Press, New York

笹屋里絵 1997 表情および状況手掛かりからの他者感情推測 教育心理学研究, **45**, 312-319.

Shantz, C. U. 1987 Conflict between children. *Child Development*, **58**, 283-305.

Thorne, B. 1986 Girls and boys together; but mostly apart: Gender arrangements in elementary schools. In W. W. Hartup & Z. Rubin(Eds.), *Relationships and development*(pp. 167-184). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

山本愛子 1995 幼児の自己主張と対人関係－対人葛藤場面における仲間との親密性および既知性 心理学研究, **66**, 205-212.

山本愛子 1994 対人葛藤場面における幼児の問題解決方略に関する発達的研究 広島大学教育学部紀要第１部(心理学), **43**, 241-249.